

人文学部プロジェクト活動報告

人文学部は、以下のプロジェクトに戦略的経費（研究プロジェクト助成）を配分しています。（右は代表者。）

刊行物助成

英語と英米文学

池園 宏

独仏文学

武本雅嗣

山口地域社会研究

速水聖子

アジアの歴史と文化

阿部泰記

山口大学哲学研究会

柏木寧子

研究推進体

東日本大震災における避難者のリスク意識と

社会的ネットワークに関する比較研究

高橋征仁

『英語と英米文学』

『英語と英米文学』は、山口大学人文学部・教育学部・経済学部・工学部・留学生センターに所属する教員グループが、年1回刊行している学術研究誌である。メンバーは現在16名で、このうち人文学部教員は英語学・英米文学コース所属の5名（岩部浩三、太田聡、赤羽仁志、宮原一成、池園宏）である。掲載内容は各メンバーの日頃の研究成果を反映した論文等で、その領域は英語学・英米文学・英語教育・英語圏文化など多岐に及んでいる。1965年に創刊された本誌はほぼ半世紀に及ぶ歴史があり、今年度で第49号の刊行を迎える。最新号の掲載内容は以下の通りである。

岩部 浩三、「総称文研究の新展開」

Kayo FUJIMURA, "A Cross-Cultural Study of Compliments and Compliment

Responses in Conversation"

池園 宏、「*An Artist of the Floating World*における主従関係」

鴨川 啓信、「*Life of Pi*における物語生存戦略—Yan Martelの小説から映画版へ—」

Toshiaki TAKAHASHI, "Teaching the Countability of Abstract Nouns: A Practical Approach"

Mitsuyasu MIYAZAKI, "*Heart Matters : Short Stories by Yamamoto, Shugoro* (3): A Translation"

なお、人文学部から配分された戦略的経費（研究プロジェクト助成）は、今年度の刊行・発送に要する全費用の一部として有効に活用されている。また、本誌の電子版は山口大学学術機関リポジトリ YUNOCAにより学内外に広く公表されている。これらの支援を受け、『英語と英米文学』は今後も継続的に各研究者の活動成果の公表に寄

与していく予定である。

(池園宏)

『独仏文学』

山口大学『独仏文学』は山口大学独仏文学研究会が年 1 回刊行している学術雑誌で、今年度で第 36 号となる。

山口大学独仏文学研究会はドイツ語学・文学、フランス語学・文学を研究領域としている教員の内の希望者を正会員とし、その他、元正会員だった者の内の希望者を名誉会員とし、さらに、ドイツ語学・文学あるいはフランス語学・文学の非常勤講師の内希望者を準会員としている。

第 36 号の掲載論文は次の 4 本である。

NATSUME Soseki: Der Bergmann.
Kapitel 11 bis 20. Aus dem Japanischen
übersetzt von Franz Hintereder-Emde

Franz-Hintereder Emde

古高ドイツ語 Isidor における属格付加語
の位置 (1)

下寄正利

Überleben in der Shoah: Ausgewählte
Tagebücher, Memoiren, Bilder und
Briefe von im KZ Theresienstadt
internierten Kindern und Jugendlichen

Felicitas Dobra

サシャ・ギトリの戯曲と映画における幸
福感

Michel de Boissieu

なお、執筆者は 4 名とも正会員で、内 Franz-Hintereder Emde と下寄正利と Michel de Boissieu は人文学部の所属である。

(武本雅嗣)

山口地域社会研究

「山口地域社会研究」プロジェクトは、山口地域社会学会の研究活動により成り立っている。

2014 年は、3 月・7 月・11 月の計 3 回の研究例会を開催した。このうち、3 月 8 日の第 34 回研究例会は、山口大学研究推進体「東日本大震災における避難者のリスク意識と社会的ネットワークに関する比較研究」および山口大学人文学部との共催でシンポジウム「東日本大震災から 3 年を迎えて—今、そしてこれから必要な支援を考える—」を開催した。山口地域社会学会の会員をはじめ、多くの市民も参加する中で、第 1 部では「大規模災害時の広域避難を考える」として関西学院大学災害復興制度研究所の山中茂樹氏による基調講演が行われた。続く第 2 部では「福島県いわき市からの視点～復興、長期避難、自治体間支援の現状と課題」と題して東日本国際大学の福迫昌之氏、早稲田大学の川副早央理氏、山口県宇部市防災危機管理課の藤田慎太郎氏による報告がなされ、活発な質疑応答・討論が展開された。

なお、今年度の研究例会の成果を踏まえて、年度末に学術雑誌『やまぐち地域社会研究』(第 12 号)を刊行する予定であり現在、編集作業を進めているところである。

(速水聖子)

『アジアの歴史と文化』

私たちの研究誌『アジアの歴史と文化』は山口大学とその関係者(退職した教員、国外の学術交流者など)の中国学を中心と

する学術研究の成果を国内外に伝えることを目的としています。研究会の前身は文理学部時代の山口支那学会であり、「中国の歴史と文化」2巻を刊行しました。人文学部になって漢籍調査班を組織し、『明倫館漢籍・準漢籍目録』等の目録を編纂しましたが、最近はおつばら研究誌『アジアの歴史と文化』の刊行に努め、人文学部プロジェクト研究経費の支援を得て定期刊行し、学界に新説を発表しております。19号は言語学、歴史学、考古学、哲学、文学、民俗学の各方面からの論述を掲載しました。目次は以下のとおりです。

方中履『古今釋疑』の執筆と刊行について……………富平美波
 汉代“大石”“小石”新考……………馬 彪
 殷・周の人形鬼神と獣形鬼神……………近藤喬一
 唐詩攻略法……………松尾善弘
 解读商圣范蠡的经济智慧……………孟 修祥
 女性意識の視点から見た『儒林外史』……………章 芳
 “華工禁約”小説中的西方形象—以佚名的《苦社會》為例……………鄒 小娟
 論《詩經》的人文精神的體現及其流傳……………雷 莎
 中島敦『光と風と夢』論—ゴーギャンと『ノア・ノア』を中心に—……………郭 玲玲
 前漢時代の「質子」（「侍子」）外交—漢の匈奴・西域諸国との関係を中心に—……………中村桃子
 武陵山區土家族聚居區“撒葉兒呵”的源流及嬗變……………向 會斌
 漢川善書の台書上演—『販馬記』……………林宇萍・阿部泰記
 通俗形式による勸善宣講について……………

……………阿部泰記

これからも私たちはアジアの歴史と文化に関する調査研究成果を積極的に発表していきたいと考えております。ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

(阿部泰記)

山口大学哲学研究会

山口大学哲学研究会は、山口大学に所属する哲学・思想系教員を中心とする組織で、年1回の会誌発行、合評会、研究発表会等の活動を行っている。現在正会員（学内の常勤教員である会員）は12名で、うち人文学部教員は、ジュマリ・アラム、栗原剛、藤川哲、村上龍、横田蔵人、脇條靖弘、柏木寧子の7名、他学部教員は、岡村康夫（教育学部）、佐野之人（同）、村上林造（同）、山本勝也（経済学部）、青山拓央（時間学研究所）の5名である。また、名誉会員（過去に山口大学に所属したことのある学外会員）のうち、人文学部の元教員は、上野修、遠藤徹、奥津聖、加藤和哉、木村武史、周藤多紀、武宮諦、田中均、外山（松本）紀久子、林文孝、古莊真敬、頼住（佐藤）光子の12名である。

2014年度には、前年度運営委員の脇條が世話役となり、『山口大学哲学研究』第21巻の合評会・研究発表会を開催した。要領は以下の通りである。

- ・日時：2014年9月16日（火）13:00～18:00
- ・場所：山口大学人文学部第6演習室
- ・プログラム

《研究発表》「「認知宗教学」——方法論の応用に向けての一試論——」（発表者：ジュマリ・アラム）

《合評》青山拓央「存在と相貌——野矢茂樹『心と他者』検討——」（代表質問者：柏木寧子）

《合評》佐野之人『『善の研究』における西田の人間観——神、人、世界——』（代表質問者：横田蔵人）

《合評》山本勝也「アダム・スミスにおける公共性と自己利益の追求」（代表質問者：藤川哲）

また、2015年3月に『山口大学哲学研究』第22巻を刊行予定である。ジュマリ・アラム、木村武史、末松壽、林文孝の4名が論文・資料を執筆している。同誌刊行に際しては、山口大学人文学部予算より支給された「平成26年度研究経費に係る戦略的経費（刊行物助成）」を印刷・製本費の一部に充てさせていただいた。本年度運営委員は、柏木、山本の2名が担当した。

（柏木寧子）

東日本大震災における避難者のリスク意識と社会的ネットワークに関する比較研究

この研究推進体は、平成24年10月に認定され、現在、約2年を経過したところである。人文学部からは、横田尚俊、速水聖子、岡邊健、高橋征仁の4名、教育学部からは田中理絵1名が、この研究推進体に参加している。

この研究組織の特色は、東日本大震災をめぐる避難者や支援活動の現状と課題につ

いて、西日本地域を中心に総合的な調査研究を行う点にある。大規模災害に際して、集団や個人が、広域的なネットワークを駆使してレジリエンスを発揮するプロセスを捉えようとする研究は、国内外に類例がなく、西日本地区を代表する災害研究の拠点となりつつある。

この研究推進体では、毎年3月に公開シンポジウムを開催し、地域住民に広く研究成果を伝える活動を行っている。平成26年3月には、「東日本大震災から3年を迎えて——今、そしてこれから必要な支援を考える——」（3月8日、大学会館）を開催した。基調講演として、山中茂樹教授（関西学院大学復興支援制度研究所）をお招きし、阪神大震災と東日本大震災の制度支援についてお話していただいた。その後、被災地の現状や広域支援・広域避難について、被災地の研究者や推進体メンバーらが研究報告を行い、地域住民と活発に議論を行った。

平成27年度の公開シンポジウムでは、田中淳教授（東京大学）と橋本晴行教授（九州大学）、宮定章氏（NPO 法人 まち・コミュニケーション）、村上ひとみ准教授（山口大学工学部）らをお招きして、「大規模災害からの教訓をどう活かすか」について、地域住民と議論を行う予定である。

このほか研究推進体の2014年の活動成果としては、学術論文3本、学会・研究会報告11本、講演2本、外部資金獲得1件（科研費）などが挙げられる。

（高橋征仁）